

日本漢音と閩南方言¹

—中古鼻音声母の非鼻音化を中心に—

蔣 垂 東²・舘 野 由 香 理・坂 上 智 一

Sino-Japanese Kan-on and Southern Min dialects

— Focusing on Denasalization of Initials in Ancient Chinese —

Jiang Chuidong · Yukari Tateno · Tomokazu Sakaue

在日译汉音中，中古次浊鼻音明・泥・娘・日四组的对音多读为音位相同的浊音。长期以来学界接受马伯乐（1920）和有坂（1940）的观点，认为日译汉音的这一现象反映了8～10世纪长安等地中国西北方音所发生的去鼻化现象。进入90年代以后，有学者提出新的观点，认为日译汉音的上述现象跟闽南厦门方言中的去鼻化相对应，表明两者之间存在着渊源关系。本文试通过对厦门方言明、泥、日等组的读音的分析，探讨日译汉音同闽南厦门方言的关系。

はじめに

周知のように、日本漢字音の主要な層をなす呉音系字音³（以下では、呉音と略す）と漢音系字音⁴（以下では、漢音と略す）は少なからぬ点

1 本稿は、科学研究費補助金（基盤研究（B）「日本漢字音データベース（大字音表）作成のための基礎的研究」研究代表湯沢質幸）による研究成果の一部である。

2 jiang@koshigaya.bunkyo.ac.jp

3 5・6世紀の中国揚子江下流域、呉地方の音の流れを汲む字音（林1980：676）。

4 隋から唐代中期にかけて（7～10世紀）中国に渡った留学生や日本に渡来した中国人などによって伝えられた、洛陽・長安を中心とする西北方音に基づく字音（林1980：676-677）。

5 6～10世紀『切韻』（601年成立）の基礎となった方言の音を指す。

で異なる特徴を有し、中国語中古音⁵（以下では、原音と略す）の鼻音声母（頭子音）の写し方の違いがその一つである。表1のように、原音の鼻音声母明母（重唇音）[m-]、泥母（舌頭音）[n-]、娘母（舌上音）[ɲ-]、日母（半齒音）[ɲ-]、疑母（牙音）[ŋ-] は、呉音では明母をマ行、泥／娘／日母をナ行に写すのに対し、漢音では多くの場合、明母をバ行、泥／娘母をダ行、日母をザ行に写している。疑母は、呉音と漢音のどちらもガ行に写し、これは日本語には [g] と [ŋ] を書き分ける手段がなかったためと考えられる。以下、漢音については疑母を除いた形で、論を進めることとする。

表1 原音の鼻音声母の写し方に見られる呉音と漢音の違い

字母	明 [m-]	泥 [n-]	娘 [ɲ-]	日 [ɲ-]	疑 [ŋ-]
例	木	男	女	人	義
呉音	モク	ナン	ニョ	ニン	ギ
漢音	ボク	ダン	ヂョ	ジン	ギ

原音の鼻音声母を非鼻音の濁音に写す表1の現象は漢音の主要な特徴の一つであるが、漢音では全ての場合において鼻音声母を例外なく非鼻音の濁音に写すというわけではない。「明 [miəŋ]」をメイ、「寧 [niəŋ]」をネイと読むように、鼻音韻尾をもつ字の場合、漢音でもマ行、ナ行に写す例が一部存在する。

Maspero (1920)⁶、有坂 (1940)⁷以降、鼻音声母の多くを非鼻音の濁音に写す漢音の特徴は、唐代 (618 ~ 907) の長安音で起きた鼻音声母の非鼻音化⁸を反映したものであるという見方が学会の共通認識と

⁶ Le dialecte de Tch'ang-ngan sous les T'ang. Bulletin de l'École française d'Extrême Orient XX; 1-24. 本稿は、『張清常文集（第四卷）』所収の張清常1935年訳中国語版に従う。

⁷ 「メイ（明）ネイ（寧）の類は果して漢音ならざるか」（1957年三省堂『国語音韻史の研究 増補新版』再録）pp.369-374

⁸ denasalization

なっている。しかし、1990年代に、Sung (1992)⁹、嚴 (1994)¹⁰ が海外の有力学術誌で新しい説を発表した。この新しい説は、中国南方閩南方のアモイ（廈門）方言に存在する中古鼻音声母の非鼻音化の現象と漢音の上記特徴などとの間に対応法則が見られるとして、両者は「歴史淵源関係」（嚴1994：101）にあると主張している。本稿は、こうした現状を踏まえて唐代長安音との関連についての確認を行いつつ、アモイ方言における中古鼻音声母の非鼻音化の実態に対する再検討を通して、漢音との関連について考察を試みたい。

1. 漢音と唐代長安音

1-1. Maspero (1920) は、梵漢（サンスクリットと漢語の）対音資料などを用いて、唐代長安音の音声変化の実態について考察を行い、7世紀と8～10世紀の漢訳仏典の陀羅尼におけるサンスクリットの転写に用いられる用字に違いが見られることを発見した。鼻音声母の場合、表2のように、7世紀の陀羅尼では、鼻音声母をもつ字はサンスクリットの鼻音で始まる音節の転写にのみ用いられ、両者は鼻音対鼻音で規則正しく対応しているのに対し、表3-1が示すように、8世紀に入っ

表2 7世紀の陀羅尼における梵漢対音例

梵語	漢字	梵語	漢字
ma	摩 [muá] 明母	na	那 [ná] 泥母
man	曼 [muán] 明母		娜 [nâ] 泥母
mu	沒 [muǝ̀t] 明母		拏 [n'â] 娘母
mo	牟 [mǝ̀u] 明母	nam	南 [nám] 泥母
mi	弥 [m'í] 明母	ni	尼 [ni] 泥母
	弭 [mí] 明母		

⁹ “Chinese Dialects and Sino-Japanese” 中央研究院歴史語言研究所會議論文集之二『中国境内語言暨語言学（第一輯）漢語方言』pp.563-585

¹⁰ 「從閩南話到日本漢字音」『中国語文』1994年第2期pp.92-101

てから、不空金剛（705～774）及びその流派が手がけた陀羅尼では鼻音声母をもつ字の多くはサンスクリットの非鼻音の有声音の転写に用いられ、用字に顕著な変化が見られるようになった。Maspero氏はこうした事実を踏まえて、長安音の鼻音声母に音声変化が起きたと指摘し、さらにはほぼ同時期の中国語とチベット語の対音資料や漢音も同様の現象を反映しているとして、これらの資料をもとに、7～8世紀の長安音において [m-]（明母）→ [mb-]、[n-]（泥、娘母）→ [nd-]、[ɲ-]（日母）→ [nz-]、[ŋ-]（疑母）→ [ng-]、[ɱ-]（微母¹¹）→ [mɰv-] という鼻音が弱化したことによる非鼻音化が起きたと推定し、この変化では、鼻音声母は調音の際、鼻音の閉鎖を維持しながら口蓋垂が上昇するため、後半の鼻音的要素が弱まってしまうと説明している。

漢音における鼻音声母を非鼻音の濁音に写す写し方を唐代長安音で起

表3-1 8世紀の陀羅尼における梵漢対音例（1）

梵語	漢字	梵語	漢字
ga	誡 [há] 疑母	d	那 [ná] 泥母
g	佉 [h'ùt] 疑母		捺 [nāl] 泥母
gi	似 [h'i] 疑母	da	娜 [ná] 泥母
gu	虍 [h'üiu] 疑母	di	你 [n'i] 娘母
j	日 [hiel] 日母	du	努 [nu] 泥母
j	入 [hiùp] 日母		咄 [n'io] 娘母
j	爾 [hi] 日母	de	祢 [ni] 泥母
ja	惹 [hià] 日母	do	怒 [nu] 泥母
ji	餌 [hi] 日母	ba	末 [muat] 明母
		bud	没 [muùt] 明母
		b	没 [muùt] 明母
		be	迷 [miei] 明母
		bo	冒 [máu] 明母

* 漢字の音は7世紀の推定音、以下同じ。

¹¹ 7世紀の長安音において両唇閉鎖音（重唇音）明母 [m-] より分裂した唇齒摩擦音で、輕唇音と呼ばれる。

きた非鼻音化と結びつけた研究としては管見の限り、Maspero (1920) が最も早いものである。

8世紀の梵漢対音資料では、鼻音声母の字は多くの場合、非鼻音の有声音の転写に用いられるが、表3-2のように、鼻音韻尾をもつ字に限って、サンスクリットの鼻音の転写に用いられる例も存在する。

表3-2 8世紀の梵漢対音例(2)

梵語	漢字	梵語	漢字
man	滿 [muán] 明母	na	囊 [nán] 泥母
mañ	瞢 [mũ`n] 明母	na	囊 [nán] 泥母
		naṃ	難 [nán] 泥母
		nam	南 [nám] 泥母
		nya	孃 [niāñ] 娘母

Maspero氏は、表4-1と表4-2の唐代漢語とチベット語の対音資料(『千字文』残巻)の対音例においても鼻音声母は、疑母を除き、鼻音韻尾がない音節はチベット語の有声音、鼻音韻尾がある音節はチベット語の鼻音に対応する場合があるという現象を発見した。

こうした現象について、Maspero氏は、鼻音韻尾がある場合、韻尾の影響で音節全体が鼻音的になるため、鼻音声母が消失せずに鼻音を維持すると分析している。Maspero氏が発見した、鼻音声母は、鼻音韻尾がない音節では非鼻音化し、鼻音韻尾がある音節では鼻音を維持する場合があるという唐代長安音のこの現象を有坂(1940:373)は「頭音交替

表4-1 藏漢対音『千字文』(残巻)の対音例(1)

チベット語	漢字	チベット語	漢字
'dab	納 [náp] 泥母	'gü	梧 [ñu] 疑母
'de'i	内 [nuái] 泥母	'gi	義 [ñ'i] 疑母
'bāg	漠 [muák] 明母	'gā	雅 [nā] 疑母
'büg	目 [m'iuk] 明母	'gāg	岳 [ñāk] 疑母
'ba	磨 [muá] 明母		
'bir	蜜 [m'iei] 明母		

表4-2 蔵漢対音『千字文』(残巻)の対音例(2)

チベット語	漢字	チベット語	漢字
no	𪛗 [nān] 泥母	'gwān	翫 [n'üü'n] 疑母
ne	寧 [nieñ] 泥母	'gīn	銀 [n'ieñ] 疑母
'noñ	農 [nón] 泥母	'gān	鷹 [niü'n] 疑母
'nām	南 [nām] 泥母		
myān	面 [m'ien] 明母		
me	明 [m'ieñ] 明母		
mān	孟 [mèn] 明母		

の法則」と呼んでいる。なお、Maspero氏は漢音については、鼻音声母をもつ字は鼻音韻尾の有無を問わず、全て濁音に写しているとしつつも、本居宣長の『字音假字用格』で取り上げられた「茫／忙／莽／亡／妄／忘／網／輞／盲／蟲／孟／猛」をまう¹²、「明／名／命／鳴」をめい¹³、「農／濃／膿」をのう¹⁴と読む、期待されている漢音とも呉音とも異なるが、常用する字音の例に着目して、これらの例はいずれも鼻音声母でかつ鼻音韻尾をもつ字であることを指摘し、漢音は梵漢対音、蔵漢対音資料と同じ系統の音を反映していると強調している。

1-2. 羅(1933)¹⁵は、蔵漢(チベット語と漢語の)対音資料と呼ばれる敦煌から発見された8～11世紀に成立した漢蔵対音『千字文』(残巻, Maspero 1920で取り上げられたもの)、漢蔵対音『大乘中宗見解』、蔵文訳音『阿弥陀経』、蔵文訳音『金剛経』に加え、822年にラサに建てられた「唐蕃会盟碑」(拓本)計5種類の資料を手がかりに唐五代期の

¹² これらの字については、『字音假字用格』(p.368)に「漢(音)ハ皆ばう也、呉(音)ハミヤウナレドモ、常ニ漢(音)ヲまうト呼フ」とある。(筑摩書房1970年版『本居宣長全集(第五巻)』所収本による、括弧内は本稿筆者によるもの以下同じ)

¹³ これらの字については、『字音假字用格』(p.368)に「みやうハ呉(音)也、漢(音)ハバエイナレドモ、皆常ニめいと呼フ」とある。

¹⁴ これらの字については、『字音假字用格』(p.367)に「漢(音)ハどう也、呉(音)ハぬナレドモ、常ニのうト呼フ」とある。

¹⁵ 『唐五代西北方言』国立中央研究院歴史語言研究所单刊甲種之十二

表5 蔵漢対音資料における鼻音声母の用法

チベット語	漢 字								字母
	千字文		大乘中宗見解		阿弥陀経		金剛経		
	無	有	無	有	無	有	無	有	
'b-	○	○	○	×	○	×	○	×	明 [m-]
	○	○	○	○	—	○	○	○	微 [m _ɣ]
m-	×	○	×	○	×	○	×	○	明 [m-]
'd-	○	×	○	○	○	○	○	○	泥 [n-]
n-	×	○	×	○	×	○	×	○	泥 [n-]
'z	○	—	○	○	○	○	○	○	日 [ɲ-]
'j	—	—	—	—	○	—	○	—	娘 [ɲ _ɥ]
'g	○	○	○	○	○	○	○	○	疑 [ŋ-]

* 「無」は鼻音韻尾がない、「有」は鼻音韻尾がある、「—」は対訳例が存在しないことを示す。

西北方音の実態を克明に描き出した。敦煌で発見された4資料は主として敦煌など西北地方の方音、「唐蕃会盟碑」は長安の標準的な音を反映するとされている。表5は敦煌で発見された4種類の蔵漢対音資料における中古鼻音声母とチベット語の対応関係をまとめたものである。この表から、西北方音鼻音声母の内、明母と泥母は梵漢対音資料と同様、鼻音韻尾がない字はチベット語の有声音、ある字はチベット語の鼻音に対応する場合がある。日母と微母は多くの場合、鼻音韻尾の有無を問わず、非鼻音化が起きており、Maspero (1920) が梵漢対音資料において明らかにした長安音で鼻音韻尾をもつ音節は日母と微母も鼻音を維持するのとは一致しない。

「唐蕃会盟碑」では対音に用いられた漢字は延べ129字と量は少ないが、鼻音声母の字とチベット語との対応関係をまとめたのが表6である。この表から9世紀の長安音においても表5と同様の傾向を見ることができ。なお、羅 (1933) は唐五代の西北方音に見られた上記特徴は山西省の文水、興県、平陽および陝西省北部など現代西北方言の非鼻音化現象に一致するものと指摘している。

表6 唐蕃会盟碑における鼻音声母の用法

チベット語	漢 字										
	明 [m-]		微 [m̥-]		泥 [n-]		娘	日 [ɲ-]		疑 [ŋ-]	
	無	有	無	有	無	有		無	有	無	有
'b-	○	×						用 例 な し			
m-	×	○	○	○							
b-			○	○							
'd-					○	×					
n-					×	○					
z-									○	○	
'g-										○	○

* 「無」は鼻音韻尾なし、「有」は鼻音韻尾ありを示す。

1 - 3. 有坂 (1940) は、羅 (1933) を踏まえて、主要な漢音資料の一つである『蒙求』(正倉院御蔵旧鈔本)¹⁶を用いて漢音における中古鼻音声母の写し方について考察を行った。この資料の仮名注では、明母 [m-] の字にはバ行・マ行、泥母 [n-] の字にはダ行・ナ行と、それぞれ2種類の読みが見られる。明母でバ行となっている下記

沐(ホク)／邈(ハク)／模(ホ)／枚(ハイ)／米(ヘイ)／買(ハイ)／
密(ミツ)／蜜(ミツ)／冕(ヘン)／毛(ホウ)／苗(ヘウ)／廟(ヘウ)／
妙(ベウ)／馬(ハ)／母(ホ)／墨(ホク)／嘿(ホク)

の内、「冕」の1字を除いて全て鼻音韻尾をもたないもので、一方、マ行となっている

門(モン)／孟(マウ)／命(メイ)／明(メイ)／鳴(メイ)／萌(マウ)

¹⁶ 築島 (1995) によると、鎌倉時代前中期 (13-14世紀) の写本。

は、全て鼻音韻尾をもっている。また、泥母 [n-] についても、ダ行となっている

諾(タク)

は鼻音韻尾をもたないもので、ナ行となっている

囊(ナウ)／寧(ネイ)／寤(ネイ)／南(ナム)

は全て鼻音韻尾をもっている。こうした現象について有坂氏は

我々は、ここに、羅常培氏が吐蕃の音譯例について發見した特色と殆ど完全に一致するものを、我が漢音に於て發見し得たのである。これ必ず唐代の西北支那音に實在した特色を傳へてゐるものに相違無い。(p.371)

との結論を下している。さらに、娘母をダ行=女(チヨ)／匿(チャク)、微母をバ行=武(フ)／霧(フ)／文(フン)／聞(フン)／望(ハウ)、日母をザ行=戎(シウ)／二(シ)／儒(シユ)／日(シツ)／乳(シウ)／任(シム)／冉(セム)／髯(セム)に写した例について、

これら亦何れも吐蕃の音譯例と蒙求の字音との間に於て特色の相一致する點である。(p.372)

と指摘している。このように、原音の鼻音声母を多くの場合、非鼻音の濁音に写し、明母と泥母のみ鼻音韻尾をもつものに限って一部マ行、ナ

行に写す漢音の特徴はMaspero (1920) に端を発し、羅 (1933) によって明らかにされた長安など西北方音の鼻音弱化を反映するものであることが証明された。

Maspero (1920)、羅 (1933)、有坂 (1940) 以降、多くの研究者は梵漢対音、藏漢対音資料などを材料に非鼻音化など中国語音韻史および漢音との関連について数多くの成果を発表し、研究を大きく前進させてきた。紙幅の制約上、そうした研究を逐一紹介できないことはまことに残念である。

2. 日本漢音と閩南方言

日本漢音の母胎音は、隋から唐代中期にかけて（7～10世紀）中国に渡った遣唐使や日本に渡来した中国人などによって伝えられた長安を中心とする西北方音であることはすでに学界の共通理解となっており、上に見てきた漢音における原音の鼻音声母の写し方もこのような理解を支持しているが、Sung (1992)、厳 (1994) は漢語諸方言の内、漢音と閩南方言との関係が特に密接であるとの新しい説を発表した。

2-1. Sung (1992) は、呉音・漢音と中国語の方言に見られる共通の歴史的音声変化 (historical sound changes) として、primary rules 2項目、secondary rules 11項目 (10の小項目が含まれているため、実際は21項目)¹⁷ を挙げて、中国の主要方言との対比を行った末、

…based on the comparative study of the evolution of Go-on, Kan-

¹⁷ Rule 1は古無舌上音、Rule 2は古無輕唇音、Rule 3は全濁声母、Rule 4は明母、泥母、疑母の鼻音弱化、Rule 5は匣母、Rule 6は曉母、Rule 7は見母と溪母、Rule 8は知母・徹母・定母の破擦化、Rule 9は齒頭音と正齒音の摩擦音化、Rule 10は3種類の入声韻尾、Rule 11は唇内鼻音韻尾、Rule 12は喉内鼻音韻尾、Rule 13は介音、に関するもの。

on and major Chinese dialects, Go-on and Kan-on share more historical sound changes with Min dialects, Southern Min in particular, than other Chinese dialects. (p.564)

呉音と漢音は中国のどの方言よりも、閩方言、とりわけ閩南方言と同じ歴史的音変化を多く共有しているとの結果を導き出し、

…the source dialect of Go-on was Old-Min which was the speech originally spoken in Wu (呉) region during the Southern dynasties (南朝). Go-on was transmitted into Japan by way of Korea. While Kan-on was transmitted directly from Chang-an (長安), then the capital of Tang dynasty (唐朝). (p.582)

呉音は南朝時代(420～589)に古閩語が朝鮮半島経由で日本に伝わったもの、漢音は唐代長安から直接日本に伝わったと結論付けている。

そのsecondary rulesのrule 4 (a) (b) では非鼻音化が取り上げられている。rule 4 (a) の [m-] → [b-]、[n-] → [d-] は明母と泥母の非鼻音化を指すもので、漢音とアモイ方言(一部)がともにこの変化を反映し、rule 4 (b) の [ŋ-] → [g-] は疑母の非鼻音化で、呉音・漢音・閩南方言三者が一致してこれを反映しているという。

2-2. 同じ著者は巖(1994)¹⁸でも、

筆者前两年(Sung1989, 1992)把日本吴音和汉音的上古音、中

¹⁸ 巖(巖棉)はSung (Margaret M. Y. Sung)の中国名。

古音以及现代闽南话所经过的相同的历史音变（primary sound changes）和次要音变（secondary sound changes）要比跟其他汉语方言为多。…中略…

根据笔者以上研究的结论，日本吴音和汉音都跟现代闽南话的关系最接近，因此从比较这三种方言（域外方言和本土方言）的语音系统，我们可以演绎出来以下的一套语音规律，应用这套语音规律，我们可以从闽南话推演出日本吴音汉音的读法来。（p.92）

と上のSung（1992）の主張を繰り返しつつ、呉音・漢音と中国語諸方言の中で閩南方言との関係が最も密接なので、三者の対比によって語音対応法則を見つけることができ、これらの法則を応用すれば閩南方言から呉音と漢音の読み方を導き出すことができるとして、アモイ方言を例に20項目（小項目を含めれば全30項目）の対応法則を挙げている。その内容の多くはSung（1992）で挙げられた23項目の補足説明となっている。そして、

从以上所举的例字，我们可以看到日本的吴音和汉音与厦门话的关系很密切。这种关系并不是偶然的，而是有其历史渊源的。（p.101）

と、これらの法則を通して呉音・漢音とアモイ方言に見られる密接な関係は偶然なものではなくて、歴史的淵源によるものであると結んでいる。その20項目の対応法則の内、非鼻音化に関係するものは以下の通りである。

・ rule 4：疑母 [ŋ-] について、アモイ方言の [ŋ-] は呉音と漢音では [g-] になる

- ・ rule 5 (a) : アモイ方言の [l-] は呉音では [n-] (日母) になる
- ・ rule 5 (b) : アモイ方言の [l-] は漢音では [z-] (日母) になる
- ・ rule 8 : アモイ方言の [m-] (明母) は、呉音では [m-]、漢音では [b-] になる

著者は、Sung (1992)、巖 (1994) において自ら漢音が中国北方の長安から直接日本に伝わったものであるとの結論を下しておきながら、一方では、終始呉音と一緒に南方の閩南方言との対比に挙げているだけでなく、呉音と同様、閩南方言とは淵源関係にあると断じ、Sung (1992) の発生系統図では、呉音とともに閩南方言の下に置くなど、論の展開と結論は矛盾していると言わざるを得ない。また、Sung (1992) で取り上げられた13項目における呉音についての検討結果は、いずれも成立するとは言いがたいとの指摘もある¹⁹。このように、Sung (1992) と巖 (1994) は日本漢字音についての言及において多くの問題点を含んでいるといわざるを得ないが、本稿では閩南方言の非鼻音化を唐代長安音の非鼻音化の反映とするその説に注目したい。事実ならば同じ現象を反映する漢音にとって無関係とはいえないので、当然検討をしてその実態を明らかにしなければならない。以下では、アモイ方言を中心に閩南方言の非鼻音化の実態について考察してみたい。

3. アモイ方言の非鼻音化

3-1. 閩は中国南部に位置する福建省の略称で、福建省の方言は閩方言、又は閩語と呼ばれ、漢語方言の中で内部分岐が最も大きく、音声現象が最も複雑な方言として知られている。閩方言は大きくアモイ（厦

¹⁹ 高松政雄 (1994) 「日本呉音と中国閩南方音—マーガレット・宋論文に接して—」(『日本文芸研究』第46巻第2号) pp.68-81

門)を代表とする閩南方言、福州を代表とする閩東方言、建甌を代表とする閩北方言の三つに分けられている。閩南方言は福建省南部を中心に、その使用範囲は福建省内に止まらず海を隔てて対岸の台湾島の大部分、西隣の広東省西部の汕頭・潮州地区など、海南島・浙江省南部・江西省の一部、さらには東南アジアのフィリピン、シンガポールなどにまで及んでいる。なお、閩方言の使用人口は1956年の統計では約2,200万人(袁1983:22)²⁰、『中国語言地図集』²¹では5,507万人となっている。

閩方言の歴史は古く、「古無輕唇音(輕唇は重唇に帰す)」「古無舌上音(舌上は舌頭に帰す)」など上古音の声母体系を直接継承し、中古期の漢語の音声的变化による影響をほとんど受けていないことで知られている。閩方言の内部分岐は大きいですが、音声面で以下のような共通点の存在が指摘されている。例は詹(1981:185-188)²²によるが、声調記号は省略する。

- (1) 中古輕唇音 [f] がない。「輕唇は重唇に帰す」という上古音の特徴を反映して、輕唇音(非組)は一般に白話音では重唇音(両唇閉鎖音) [p-] [p'-]、文言音では [h-] 又は [x-] となる。例えば、

表7 閩方言における輕唇音

	アモイ	福州	建甌
分(文言)	hun	xuŋ	xoŋ
分(白話)	pun	puoŋ	puŋ

²⁰ 袁家驊等(1983)『漢語方言概要(第二版)』(1960年初版)文字改革出版社

²¹ 中国社会科学院／オーストラリア人文科学院編、香港朗文(遠東)有限公司1987年、1990年刊

²² 詹伯慧(1981)『現代漢語方言』湖北教育出版社

- (2) 表8のように中古舌上音 [t-] [t'-] [d-] が舌頭の [t-] [t'-] となり、「舌上は舌頭に帰す」という上古音の特徴を反映する。例えば、

表8 閩方言における舌上音

	陳	中	虫	丈	竹
アモイ	tan	tiŋ	t'an	tiŋ	tiok
福州	tiŋ	tyŋ	t'øyŋ	touŋ	tøy?
建甌	teiŋ	tœyŋ	t'ɔŋ	tiŋ	ty

- (3) 中古全濁音声母（有声子音）[b-] [d-] [d-] などは、無気無声の [p-] [t-] などになる。例えば、

表9 閩方言における全濁声母

	婆	𠵿	条	同	茶
アモイ	po	tɔ	tiau	tɔŋ	te
福州	po	tu	tɛu	tun	ta
建甌	pɔ	tu	tiau	tɔŋ	ta

- (4) 中古匣母 [ɦ-] の一部が白話音で [k-] 又は [∅-] になる。例えば、

表10 閩方言における匣母（一部）

	行	寒	糊	学	下	話
アモイ	kiā	kūā	kɔ	θo?	θe	θue
福州	kiaŋ	kaŋ	ku	θo?	θa	θua
建甌	kiaŋ	kuiŋ	ku	θo	θa	θua

- (5) 中古見母 [k-]、溪母 [k'-]、曉母 [h-] の三四等の字（現代北京音で口蓋化し [ɕ-] [ɕ'-] [ɕ-] に変化したもの）は変化せずに [k-] [k'-] [h-] ([x-]) を維持する。例えば、

表11 閩方言における見系三四等

	基	計	居	犬	香
アモイ	ki	ke	ku	k'ian	hiɔŋ
福州	ki	ki	ky	k'eiŋ	xyoŋ
建甌	ki	ki	ky	k'yin	xiɔŋ

(6) 入声があり、声調の数は、アモイと福州は7つ、建甌は6つとなっている。

(7) 表7の例に見られるように、文白（文言音と白話音）異読の現象が広く見られる。閩南方言ではその現象が特に顕著で、文言音と白話音がほぼ独自の体系をなしている。一般に、白話音は『切韻』（601）或いはそれ以前の上古音の古い特徴を多く反映し、文言音は中古音及び以降比較的新しい特徴を多く反映すると言われている。

3-2. 閩南方言の中では、アモイ方言は最も大きな影響力を持ち、広大な使用範囲をもつ閩南方言の代表とされている。アモイ方言の音韻組織は14の声母、75の韻母、7つの声調から成り立っている（詹1981：188-193）。音声面では3-1で取り上げた閩東、閩北と共通する特徴の他に、下記のように閩東、閩北と異なる特徴も少なくない。

(8) アモイ方言では中古音の次濁鼻音声母明母 [m-] 泥母 [n-] 日母 [ɲ-] 疑母 [ŋ-] は非鼻音化で [b-] [l-] [g-] となるが、閩東、閩北にはこのような現象が見られない。例えば、

表12 閩方言における中古鼻音声母

	麵 ^明	網 ^微	年 ^泥	肉 ^日	額 ^疑
アモイ	bian	baŋ	lian	liɔk	gik
福州	miɛŋ	mɔyŋ	niɛŋ	nyʔ	ŋiɛʔ
建甌	miŋ	mɔŋ	niŋ	ny	ŋɛ

- (9) アモイ方言は中古漢語の鼻音韻尾と入声韻尾をほぼ完全な形で保存している。閩東と閩北では合流が進んでいる。

表13 閩方言における鼻音韻尾と入声韻尾

	鼻音韻尾			入声韻尾		
	-m	-n	-ŋ	-p	-t	-k
アモイ	-m	-n	-ŋ	-p	-t	-k
福州	-ŋ			-ʔ		
建甌	-ŋ			消失（入声調のみ保存）		

- (10) アモイ方言に [-y] 韻母がないため、四呼が揃わず、撮口韻が存在しない。閩東と閩北には [-y] 韻母があり、四呼が揃っている。例えば、

表14 閩方言における撮口韻母

	アモイ	福州	建甌
居	ku	ky	ky
鼠	ɿ'u	ɿ'y	ɿ'y

- (11) アモイ方言には韻母全体が鼻音化する鼻化韻が豊富にあるが、閩東と閩北にはこれがない。鼻化韻となったものの中には鼻音韻尾をもつものもあれば、鼻音韻尾をもたないものもあり、その発生のメカニズムには不明な点が多い。

3-3. 前掲の表12で、中古次濁鼻音の非鼻音化の現象が見られることは閩南方言の特徴の一つだと指摘したが、ここではアモイ方言における非鼻音化について具体的に見てみたい。

表15 アモイ方言の声母表

	無声無気	無声有気	有声音	鼻音	摩擦音	側面音
両唇	p 辺平房	p' 頗伴紡	b 門蚊万	(m) 媽盲		
舌尖	t 地囡知	t' 他徹待		(n) 拿連		l 柳男而
舌端	ʈ 曾莊尖	ʈ' 出葉秋	(ɖ) 入 ²³		s 時蘇	
舌根	k 球狂高	k' 可去儉	g 語言牛	(ŋ) 雅便		
声門	∅ 英勇威				h 喜欲	

* 詹 (1981) より

表15はアモイ方言の声母一覧表である。中古鼻音声母明母の多くは [b-]、疑母の多くは [g-] に変わり、泥母と日母の多くは [l-] となり、来母 [l-] に合流している。[m-] [n-] [ŋ-] もそれぞれ明母、泥／日母、疑母を伝えたものだが、独立した単位ではなく、鼻化韻の前という限定された場合にしか現れない [b-] [l-] [g-] の異音である。即ち、アモイ方言では、[b-] [l-] [g-] は陰声韻、陽声韻、入声韻の前に立つが、鼻化韻の前に現れることがない。一方、[m-] [n-] [ŋ-] は鼻化韻の前に現れるが、陰声韻、陽声韻、入声韻の前に立つことは決してなく、両者は相補分布の関係をなしている。言い換えれば、アモイ方言では中古鼻音声母の明母、泥母、日母、疑母は多くの場合で非鼻音化を起こして同じ調音点の非鼻音の有声母に変化したが、鼻化韻の前ではその強い鼻音の影響でかろうじて鼻音が保たれているということである。

アモイ方言では、明母、泥／日母、疑母は [b-] [l-] [g-] 以外への変化も見られる。表16は、同じ鼻音声母でも、文白の違いで様々なパターンがあることを示している。表17は表16のパターンをもとに整理したものである。この表を通して、アモイ方言では中古鼻音声母は、文

²³ 現代アモイ方言では日母が来母 [l-] に合流しているが、『彙音妙悟』（黄謙、1800年成立）や『匯集雅俗通十五音』（謝秀嵐、1869年成立）などの閩南方言韻書では、15の声母（柳辺求去地頗他曾入時英文語出喜）が立てられ、その中で、「柳」は来母、入は日母に相当、両者が別々の声母である。今でも漳州（一部）、泉州（一部）、潮陽などでは、「入」が [dz-] で「柳」の [l-] との区別が保たれている。

言音では疑母を除き、比較的単純であるのに対し、白話音は大変複雑で様々なバリエーションを有するということが分かる。中では、明母が [n-] と [θ-]、泥母が [t-]、疑母が [l-] と [θ-] になるのが散発的な例だが、[h-] になる現象は明母、泥母、日母、疑母の全てに見られるだけでなく、例も少なからず存在し、この方言の非鼻音化を考える上で無視できない存在である。

表16 アモイ方言における次濁鼻音声母の実態

明 [m-]		泥 [n-]		日 [ɲ-]		疑 [ŋ-]	
文言音	白話音	文言音	白話音	文言音	白話音	文言音	白話音
麵 bian	麵 mī	鬧 nāu	鬧 la	耳 nī	耳 hī	岸 gan	岸 huā
密 bit	密 ba	奈 nài	奈 ta	燃 lian	燃 hiā	畚 hiau	畚 gio
馬 mā	馬 be	年 lian	年 nī	肉 liok	肉 hik	硬 giŋ	硬 ŋī
猫 biau	猫 niāu		諾 hio ²⁴	軟 luan	軟 nŋ	蟻 gi	蟻 hia
媒 bue	媒 hm					五 ŋō	五 go
梅 muī	梅 θm					虐 giok	虐 liok
罵 mā	罵 mē					阮 guan	阮 θŋ

* 例は周・歐陽（1988）による

表17 アモイ方言における次濁鼻音声母の文白対応

	明 [m-]	泥 [n-]	日 [ɲ-]	疑
文言音	b-(m-)	l-(n-)	l-(ɲ-)	g-(ŋ-)/h-
白話音	m-/b-/h-/n-/θ-	n-/l-/h-/t-	n-/l-/h-	ŋ-/g-/h-/l-/θ-

鼻音声母が [h-] になるこの現象について、周・歐陽（1988：124）²⁵ はアモイ方言における [m-] → [b]、[n-] → [l-]、[ɲ-] → [g-] の現象と関連付けて、

²⁴ 閩南方言漳州地区の例。アモイでは泥母の白話音が [h-] になる例が見つからないが、閩南方言区のエリアでは漳州地区の他、潮汕地区でも「年 [hi]」のように、泥母が [h-] になる現象が見られる。

²⁵ 周長楫・歐陽憶耘（1988）『廈門方言研究』福建人民出版社。

看来中古次浊鼻音声母在厦门方言白读音的 [h]，是声母的条件音变（即声母弱化后，鼻音声母向清擦音声母转变）所形成的结果。这跟鼻音声母强化后使鼻音向浊塞音声母转变：m→b, n→l, ŋ→g 正好相反。……这些古次浊鼻音声母由鼻音变 [h] 并不是很晚才出现的，但要确定年代尚有困难。

と、アモイ方言における中古次濁鼻音声母が [h-] になるのは鼻音が弱化したことによる音声変化の結果で、鼻音が強化して [m-] → [b]、[n-] → [l-]、[ŋ-] → [g-] になるのとは正反対の変化であり、[h-] への変化が起きた時期はかなり古いが、年代は特定できないと述べている。

張（1989：301-302）²⁶も閩南方言で中古次濁鼻音声母が [h-] になるのは鼻音が弱化した結果、鼻音声母が口腔音化したものであると指摘した上、「年」を例に、閩南方言におけるその変化のプロセスを、

第一段階 鼻音＋母音（N＋V）

第二段階 鼻音＋鼻音化母音（N＋V、鼻音が後続の母音を同化して鼻音化母音にさせる。アモイ地区の [ni] がこの段階）

第三段階 喉音＋鼻音化母音（H＋V、鼻腔を通過する呼気の弱化により鼻音声母が口腔音になる。潮陽地区の [hi] がこの段階）

第四段階 喉音＋口腔音化母音（H＋V、口腔を通過する呼気がさらに強まり、鼻腔が完全に閉鎖される。海口地区の [hi] がこの段階）

²⁶ 張光宇（1989）「閩方言古次濁声母的白讀h-和s-」（『中国語文』1989年第4期）

と分析している。

林 (1998 : 60)²⁷ は、閩南方言における中古濁鼻音声母に見られる [m-] [n-] [ŋ-] : [b] [d-] ([l-]) [g-] : [h-] 三種類のパターンについて、

读 m、n、ŋ 是由于鼻化韵母的影响，使其保留这些声母的原来音值；读 [b]、[d-] ([l-])、[g-] 是 m、n、ŋ 的强化，使其有鼻浊音变为口浊音；读 [h] 是 m、n、ŋ 的弱化，使其有鼻音变为口音里的清擦音。

と、閩南方言の [m-] [n-] [ŋ-] は後続する鼻化韻の影響で本来の鼻音が保たれているのに対し、[b] [d-] ([l-]) [g-] は [m-] [n-] [ŋ-] の鼻音が強化して出来たもので、[h-] は鼻音弱化によるものであると指摘した上、下記『広韻』の反切異文や諧声文字に鼻音声母と喉音が交替する例が見られるとして中古次濁鼻音声母が喉音 [h-] になる現象は中古期にすでに存在していたと推定している。

・『広韻』反切異文の例

弗：魚_{疑母}倚切，又許_{曉母}羈切

豺：俄_{疑母}寒切，又可_{見母}顏切，侯_{曉母}肝切

霽：五_{疑母}高切，又許_{曉母}嬌切

箇：武_{明母}庚切，又許_{曉母}迄切

撫：武_{明母}夫切，又荒_{曉母}烏切

²⁷ 林宝卿 (1998) 「閩南方言声母白讀の歴史語音層次初探」 (『古漢語研究』1998年第1期) pp.60-63

・諸声文字の例：

明母：	每	無	微	毛	民	勿	墨	亡
曉母：	悔	無	微	耗	昏	忽	黑	荒
疑母：	訛	午	堯	驗	岌	虐	儀	
曉母：	化	曉	曉	陰	吸	諱	義	
泥母：	穉							
曉母：	薺							

このように、アモイなど閩南方言の非鼻音化には鼻音強化と鼻音弱化2種類の変化があることが明らかにされている。[m-] → [b]、[n-] → [l]、[ŋ-] → [g] の変化が鼻音強化であるということは、唐代長安音の鼻音弱化（[m-] → [mb]、[n-] → [nd]、[ŋ-] → [g]）とは現象面で類似しているものの、原理の異なる変化であることを示している。いうまでもなく、唐代長安音には鼻音声母が喉音 [h] になる例が存在せず、漢音においても原音の鼻音声母をカ行に写す²⁸ような例が報告されていない。

梵漢対音資料、藏漢対音資料、漢音は共通にして鼻音声母の頭音法則—即ち、鼻音韻尾がない音節は鼻音弱化が起き、鼻音韻尾がある音節、鼻音を維持する場合がある—を反映しているが、アモイ方言は鼻音韻尾の有無を問わず、全て非鼻音化が起きている。現象の面でも唐代長安音とは一致しない点がある。

さらに、アモイ方言では、[b] [l] [g] は中古音を反映する文言音に止まらず、中古以前の特徴を多く反映する白話音においても見られ、発生の時期の特定を難しくしている。周・歐陽（1988：122）は『切韻』

²⁸ 中古音の曉母 [h] は呉音も漢音もカ行に写している。

(601年成立)以降の変化だと指摘し、李壬癸(1992:443)²⁹は7世紀以前すでに存在していた可能性があると推定している。7世紀以前だとすれば唐代長安音の鼻音弱化が起きる前にアモイ方言には非鼻音化がすでに存在していたということになる。このことは、非鼻音化の発生の時期においても両者が一致しない可能性が高いことを示している。

4. おわりに

唐代長安音とアモイ方言とにはともに中古鼻音声母の非鼻音化の現象が見られるが、唐代長安音の非鼻音化は一種類のみで、[m-] → [mb]、[n-] → [nd-]、[ŋ-] → [g-] の変化は鼻音弱化であるのに対し、アモイ方言には [m-] → [b]、[n-] → [l-]、[ŋ-] → [g-] と [m-] [n-] [ŋ-] → [h-] という二種類の非鼻音化があり、鼻音弱化である [m-] [n-] [ŋ-] → [h-] は唐代長安音に見られないもので、鼻音強化である [m-] → [b]、[n-] → [l-]、[ŋ-] → [g-] は現象的には唐代長安音の [m-] → [mb]、[n-] → [nd-]、[ŋ-] → [g-] に類似しているが、一方は鼻音強化で、もう一方は鼻音弱化であり、発生の原理が正反対である。また、現象の面でも、アモイ方言と唐代長安音との間には一致しない点がある。発生の時期的にもアモイ方言の非鼻音化が唐代長安音の鼻音弱化より早く起きていた可能性が高い。このように、発生の原理・現象・時期のいずれにおいても、アモイ方言の非鼻音化は唐代長安音の反映ではなくて、独自に変化したものであるとの見方を支持している。

アモイ方言の非鼻音化と唐代長安音の鼻音弱化との間に関連性が認められない以上、非鼻音化がアモイ方言と漢音との「歴史的淵源関係」を証明する証拠として成立しないことは明白である。

²⁹ 李壬癸(1992)「閩南語の鼻音問題」(中央研究院歷史語言研究所會議論文集之二『中国境内語言暨語言学(第一輯 漢語方言)』中央研究院歷史語言研究所1992年) pp.423-435

主な参考文献

- 有坂秀世 (1940) 「メイ (明) ネイ (寧) の類は果して漢音ならざるか」
 (『音声学協会会報』第64号初出、『国語音韻史の研究 増補新版』
 1957年、三省堂再録)
- 〃 (1944) 「正倉院御蔵旧鈔本蒙求の漢音」 (岩波書店『橋本進吉
 博士還暦記念国語学論集』初出、『国語音韻史の研究 増補新版』
 1957年、三省堂再録)
- 袁家驊等 (1983) 『漢語方言概要 (第二版)』 (1960年初版) 文字改革出
 版社
- 嚴 棉 (1994) 「從閩南話到日本漢字音」 (『中国語文』1994年第2期)
- 小林明美 (1983) 「『呉音』と『漢音』」 (『密教文化』第145号)
- 胡 方 (1995) 「廈門話 [ʔb ʔg ʔd] 声母の声学特性及其他」 (『方
 言』2005年第1期)
- 周長楫・歐陽憶耘 (1988) 『廈門方言研究』福建人民出版社
- 詹 伯慧 (1981) 『現代漢語方言』湖北教育出版社
- 高松政雄 (1994) 「日本呉音と中国閩南方音—マーガレット・宋論文に
 接して—」 (『日本文芸研究』第46巻第2号)
- 張 光宇 (1989) 「閩方言古次濁声母の白讀h-和s-」 (『中国語文』1989年
 第4期)
- 〃 (1996) 「論閩方言的形成」 (『中国語文』1996年第1期)
- 張 清常 (1963) 「唐五代西北方音一項參考資料—天城梵書金剛經対音
 殘卷—」 (『内蒙古大学学报』1963年第2期、『張清常文集 (第一
 卷)』北京語言大学出版社2006年再録)
- 〃 (2006) 『張清常文集 (第四卷)』北京語言大学出版社
- 儲 泰松 (1998) 「梵漢対音與中古音研究」 (『古漢語研究』1998年第1
 期)

- 築島 裕 (1995)「日本漢字音研究の回顧と展望」(『日本漢字音史論輯』
所収) 汲古書院
- 沼本克明 (1995)「長承本蒙求分韻表」(『日本漢字音史論輯』所収) 汲
古書院
- 林 史典 (1980)「日本漢字音」(国語学会編『国語学大辞典』東京堂出
版、1980年初版、1982年再版)
- 北京大学中国語言文学系語言学教研室 (2003)『漢語方音字匯 (第二版
重排本)』語文出版社
- 水谷真成 (1957)「唐代における中国語語頭鼻音のDenasalization進行過
程」(『東洋学報』39-4)
- ク (1959)「Brāhmī文字転写『羅什訳金剛經』の漢字音」(『名古
屋大学文学部十周年近年論集』所収)
- 羅 常培 (1930)『厦門音系』国立中央研究院歷史語言研究所单刊甲種
之四 (1956年北京科学出版社新版、『羅常培文集』第一卷1999年
山東教育出版社再録)
- ク (1933)『唐五代西北方音』国立中央研究院歷史語言研究所单
刊甲種之十二 (1991年景印台一版)
- 李 壬癸 (1992)「閩南語の鼻音問題」(中央研究院歷史語言研究所會議
論文集之二『中国境内語言暨語言学 (第一輯 漢語方言)』中央
研究院歷史語言研究所1992年)
- 林 宝卿 (1998)「閩南方言声母白讀の歴史語音層次初探」(『古漢語研
究』1998年第1期)
- Maspero, Henri. Le dialecte de Tch'ang-ngan sous les T'ang. Bulletin
de l'École française d'Extrême Orient XX; 1920
- Sung, Margaret M. Yan (1992) "Chinese Dialects and Sino-Japanese"
(中央研究院歷史語言研究所會議論文集之二『中国境内語言暨

語文学（第一輯 漢語方言）』中央研究院歷史語言研究所、台北、
1992年）

（付記：本稿は大学院院生館野・坂上両氏との勉強会などで取り上げたテーマについてまとめたもので、内容に關しての全ての責任は蔣にある。）

『地獄の季節』の一考察

— 「地獄の夜」における語り手の身体感覚と空間把握について —

山 本 卓 ・ 藤 井 仁 奈

Une étude sur *Une Saison en Enfer*

— La sensation physique du narrateur dans *la nuit de l'enfer* —

Takashi Yamamoto · Nina Fujii

Dans *la nuit de l'enfer*, une des chapitres d' *Une Saison en Enfer*, le sujet est très simple: raconter la vie du damné dans l'enfer. Mais le narrateur change très rapidement le ton de sa voix. La narration est très changeante et incertaine. En buvant le "poison", le narrateur sent une douleur aiguë de la "flamme" qui le "brule". Brulé par la flamme, il tombe dans une sorte d'engourdissement, et se souvient de son enfance religieuse. Alors, le narrateur imite la voix de Jésus-Christ ou celle du boniment de saltimbanque, et il essaie de parodier son propre être.

Dans cette étude, nous allons analyser la sensation physique du narrateur sous l'effet du "poison" et de la "flamme". En même temps, nous essayons d'analyser l'aspect de la variété des voix qui produit des images changeantes.

1) 「地獄」の認識

「地獄の夜」は、アルチュール・ランボーによって書かれた作品『地獄の季節』の第三の章であるが、次のように始まる。